少女の告白[[1]](#footnote-1)

香山光郎

先生。

突然御手紙を差上げまして、烏滸がましい[[2]](#footnote-2)と思召すことでございませう。しかし、まだ十九歳にしかならない小娘に免じて、どうぞ、わたくしの無禮のほどお許し下さいませ。

先生の御著書「○○」を、どうしたら讀ませていたゞけるでせうか。それを御尋ねするために、こんなあつかましいお手紙を差上げるのでございます。

わたしは、生れは朝鮮でございますが、嬰児のころ親につれられて京都へまゐりまして、こゝで育つたものでございます。たゞ小學校を出ましたきり、女學校へも行つたことのない無知な女の子のわたくしでございますが、どうしましたことか、こどもの頃から文學が好きで手當次第いろいろな作家のものを讀みました。昨年からでございますがふとしたことから、わたくしは故郷が戀しくなりまして、せめて、朝鮮作家の文學作品を通してゞも、故郷の生活や傳統を知りたいと思ふやうになりました。しかし朝鮮語の讀めないわたくしには、朝鮮の本は讀めませずまた朝鮮にはどんな作家がゐらして、どんな作品があるかさへ知る由もございませぬでした。

ところが、昨年の秋、先生が京都に來られて、京都大学の講堂で、朝鮮の學生たちに講演をなさるといふことが、新聞に出て居りましたので、父にそのことを申しましたら、父は、先生が朝鮮の作家でいらつしやることを話してくれました。

御承知のごとく、當地に來て居る朝鮮同胞は、いづれも、教養も資産もない人々ばかりでして、故郷の朝鮮は、あんなに文化の低いところかなと、情なく思つて居りました。京都帝大には理學博士や工學博士の學位を持つて居られる朝鮮出身の教授や助教授が居られるといふことが、せめての誇ではございましたものゝ、思想や文學方面にも故郷に偉い方が居ればいゝなと思つてゐた矢先故、わたくしは、女の出る場所でないと、父に止められたにも拘らず、先生の講演會場へまゐりましたのでございます。

あの晩聴衆席の後方の、入口に近い隅つこの方に、小さくなつて居りました一人の小娘が先生のお目には止まらなかつたでせうか。

先生が壇上にお現れになつたその瞬間、わたくしは、電氣に打たれたごとくでございました。何故でせう。たゞの故郷から見えた偉い方だと聞いた、そのお方を眼のあたりに見たからでした。

先生は諄々と日本の國體や大東亞戰爭目的の正義性を説かれ、帝國に於ける朝鮮民衆の地位とその進むべき道を説かれました。そして、朝鮮人の祖先の文化や、氣高い忠誠と武勇のかずかずを述べられ、現在の朝鮮同胞の、卑屈、腑甲斐なさを嘆かれた時、わたくしは唇を噛みしめましたが、たうたうしやくり上げてしまひました。わたくしの隣の男の學生も啜り泣くのが聞えました。先生も御聲が詰つて、しばし、立つて居られました。あの時の先生のお姿は、故郷そのもゝのやるに、たふとくありがたく思はれました。

會場から出て、わたくしは、電車道に沿うて折からの満月を賞して居られる先生の後姿を飽かずお慕ひ申上げました。

翌朝私は、新聞記事を頼りに、大膽にも先生のお宿を訪ねましたが、もう先生は東京へ立たれたと聞かされまして、わたくしは、泣きたくなりました。何故もつと早くお訪ねしなかつたらうと、くやしがりました。

わたくしは、先生の著書の中に、「○○」といふのがあることを或雑誌で讀みました。それは、秋――先生の批評でありましたが、あの作品はアジヤが生んだ最高の思想を盛つたものであると激賞してありました。わたくしは、この文を讀みまして、自分が賞められたやうに憙びました。でも、雜誌や新聞で澤山の名前の中で、わたくしの故郷の方の名前は見當りませぬもの。それがどんなにか、わたくしを心細く、うら寂しくしたことでせう。

そこで、早速京都中の本屋を捜し廻りましたが、先生の御本は見あたりませぬ。いや先生の御本ばかりではありませぬ。朝鮮作家のものは一冊も見あたらぬ時の、わたくしの淋しさ。わたくしの郷里といふものは、これほど貧弱な、文化の低いものでせうか。先生もおつしやつたやうな、祖先の古文化は何故朝鮮では衰へてしまつたのでせうか。先生、それは誰の責任でせう。わたくしたちの親たちが、怠惰で腑甲斐なかつたせいでせうか。先生、たしかに、さうでございます。わたくしの家も父の話では、昔は名家だつたと自慢してゐる癖に、今のありさまでは、お恥かしいほど文化の低い家庭でございます。父は、最近小錢を溜めて、經濟的には、餘程樂になりました。けれども、家庭に文化的潤を持たせようとは考へてゐないやうでございます。わたくしの家庭には、佛壇も神棚もございませぬ。お宮まゐりもお寺まゐりも致しませぬ。床間にはわたくしが自己流のお花を活けたり致しますが、父も母も振向きもしませぬ。こんな、宗教も藝術もない家庭は誠に寂寞たるものでございます。父は金儲に専念して居ります。吝嗇といふほどではありませぬが、金を一番高く評價してゐるやうで、わたくしたちにも金を大事にすることを、一番厳しくしつけます。長年貧困の中に、苦労して來た父や母としては、金を大事にするのも無理はないと、わたくしも時々反感が消えてほろりとすることがございます。

先生、これはわたくし[の]家庭ばかりではありませぬ。當地[に]來てゐる故郷の人たちは、似たり寄つたりで、誠に情なく感じます。先生、朝鮮同胞が皆さういふわけではないでせう。朝鮮にも、高い信仰の厳そかさや、豊かな藝術の熱のある生活がありますでせう。こちらに來てゐる人たちは、いづれも郷里の溢れもので、職と食を求めて流離してゐるものだから、こんなに、あさはかで、無風流なのでせう。わたくしは、さうだと一人極に信じこんで居ります。

わたくしは故郷の高い方、偉い方が見たい、その文學や藝術が見たいのです。そして文化の高い、故郷の部落をいろいろと想像して居ります。母は、郷里はいゝところだと、口癖のやうに申して居りますので、ど[う]ぞさ[う]で[あつて]ほしいと念願して居ります。

親は、昨年から、わたくしに結婚を勸めて居ります。命じて居ると申した方が、適切でございませう。親たちは、數十萬の小錢を溜めた今日の生活に非常に滿足して居るやうですし、兄も最近金持の御曹子振りを示して居ります。しかし、兄やわたくしが學校に行つてゐた時分には、小學校さへやつとのことで通はせていたゞいたのでございますから、兄もわたくし[も]中等學校の門に足を入れたことさへございませぬ。しかし金が出來ますと兄には、よい嫁をほしがりますし、わたくしのためには、身分不相應の婿金を、親たちは探して居ります。

わたくしのために、父が二人ばかりの候補者を見立てゝ、わたくしの同意を求めましたが、わたくしは二人ともお斷り致しました。そして父の權幕で、ひどく叱られました。

「お父さん、わたくし、まだ、お嫁になんか行きたくありませぬ。まだ子供ですもの」

と申して、つひこないだも、さめざめ泣きました。

親たちは、わたくしが縁談に耳を傾けないのをひどく氣に致しまして、最近は、足止を命ぜられて、一週一度の外出も許されて居りませぬ。女の子に、かういふ風に厳しくするのが、故郷の傳統だとわかると、それさへなつかしい氣が致します。母は十二歳の頃から、門外に出ることを禁ぜられたと、自慢さうに、わたくしに申します。わたくしは最初は反抗もし、くやしくも思ひましたが、宗教も藝術も歴史も忘れた、親たちの唯一の文化傳統だと思つて、今では神妙にして居ります。その昔、母や祖母たちが、アンパンとやらの奥座敷に閉ぢこめられてゐた時代を偲びまして、自分もその時代に歸つたのだと思ふと、在留同胞たちのあさましい現實を見せつけられるよりは、かへつて氣樂にも存じます。

かういふ風に一室に籠つてばかり居りますと、尚更讀書と空想にばかり耽ります。小さい時から仕馴れたお䑓所の水仕事や雜巾掛も最近二三年來は、母がさせませぬ。お前たちを苦勞させたくないばかりに、父が五十の今日まで、食はず飲まず働いたのだといつては、わたしたち兄妹を樂にさせることばかり考へてゐる父でございます。これはたしかに、間違つた親の愛だと存じますが、父は決して自分の意見を曲げませぬ。わたくしは親の愛には泣きます。それでありながら親たちの腑甲斐なさが悲しうございます。何故もつと救はれるやうな人たちにならなかつたのでせう。何故、もつと、わたくしたちが矜らしく人さまの前に紹介出來るやうな親たちにならなかつたのでございませう。何故もつとすばらしい故郷を作上げて、旅の人たちに敬虔の念を起させる朝鮮にすることが出來なかつたのでせう。わたくしたたちが、人さまの前で、肩身の狹さを感じますたびに、わたくしは親たちを怨めしく思はずにはゐられませぬ。

先生。わたくしが、これほどまでに故郷や親たち（むしろ祖たちと書くべきでせうか）を怨めしく思ふやうになりましたのは、わたくし個人の特殊事情にもよることゝ存じます。話がちと長くなりまして、恐入りますが、どうぞ、一人の女の子の身の上話を御許し下さいませ。

わたくしが通つて居りました小學校には、土地柄上流のお子さま方の同窓が多うございました。わたくしの組でたつた一人の朝鮮の子のわたくしをいつまでも友達にして下さつたのは川村妙子といふ方でございました。妙子さんは、歌人で名を謡はれました、あの川村子爵の令孫で、華族のお嬢さんでありながら、ちつともそれを鼻におかけにはならないでわたくしと仲よくして下さいました。わたくしは、小學校を出ると、上級學校は行かれずに終りましたけれど、妙子さんは、女學校へおはいりになりました。それでも、妙子さんは時々わたくしをお誘ひ下さつて、川村子爵家へずつと出入をつゞけてまゐりました。

川村子爵家は、お金持ではありませぬが、舊家、名家の體面を維持するだけの資産はおありのやうで、質素ながらも、大變お上品な生活をなさいましたし、蔵書や美術品も多く、折々歌の會や、茶の湯も催されて、わたくしも、名家の令嬢たちや、若さまたちと、おつきあひを許されました。それから、妙子さんの學友といつた形で、お琴や花のお相手もさしていたゞきましたので、わたくしはいはゞ、身分不相應な、高度な教養に馴染むことが出來たわけでございます。

わたくしも年が、十七、十八と進み、物心つくに從つて、日本文化の味が、少しは分つて來るやうな氣が致しました。また、妙子さんの因縁で、他の名家に呼ばれたことがございまして、過去四五年間、上流家庭の生活のいろいろな面を拜見することが出來ました。とても雅やかで、さびがあつて、しとやかで、美しうございます。かういふ文物を見るにつけて、わたくしは、いつとはなしに、朝鮮を思ふやうになりました。わが郷里の朝鮮にもこれほどの文物があるのかな、と。その度ごとに、わたくしは、父のところへ尋ねて來る、郷里の人たちの無躾な、あさましい姿と思ひあわせました、どんなにか嘆いたことでございませう。

川村家の御親類で、谷村といふ方があつて、この方は、もう七十に近い御老人でいらつしやいますが、銀行家でありながら大變な學者で、ことに、日本と朝鮮關係の古代歴史については、大學の教授方も兜を脱ぐぐらゐの權威者ださうでございます。その方の書齋を拜見させていたゞきましたが、朝鮮の本も澤山ございまして、わたくしが朝鮮娘だとお聞きになつて、

「あゝ、さうですか」

と大層お喜びになり、令息の克麿さんや、御令孫淺茅さんや、妙子さんや、わたくしなどの若いものたちを前にして、いろいろと、朝鮮の昔のことや、日本との關係を御話し下さいました。

「日本と朝鮮とは、もともと同祖同根だよ。しかも、信仰も文化も一つだ。お互によそよそしくなつてから、一千年以上になる。しかしその間にさへ、血や文化は絶えず交流して居つたんだな。奈良や京都の昔は、新羅や百濟の昔の都と同じ文化だつたんだ。高麗だつて同様さ」

と、いつて、谷村老人は、高勾麗の古墳の壁畫の寫眞だの、藤原時代の服装の繪をお示しになつて、

「どうだい、同じだらう」

などゝ話して下さいました。

それから、聖徳太子のお師匠さんが、高勾麗の僧惠慈法師であつたことや、大和法隆寺の設計者が、百濟の僧の惠聡であることや、有名なその壁畫が、高勾麗の僧曇徴の作であることや、その他、わたくしに取つては、初耳のことを澤山聞かして下さいました。それから、祇園の八坂神社は、伊弉諾尊[[3]](#footnote-3)をお祭り申し上げてゐるのだが、これはもともと高勾麗人の移住民が建立した神社であるとか、同じく京都の平野神社は桓武天皇さまの御母后の、御先祖様が百濟から御移し申上げたものであるとか、その他佛教や、音樂や、工藝のことなどにつきましても、一々本や寫眞をお引出しになつて説明して下さいました。さうして、最後に、

「だから、日本と朝鮮とは、もともと一つだよ。神さまも一つ、血も一つ、文化も一つだ。たゞ、千年來、朝鮮はあまりにも支那文化に耽溺して、自分を失つたんだな。朝鮮人の昔の文化が十あるとしたら、朝鮮に殘つてゐるものは、三ぐらいかな、あとの七は日本にちやんと殘つてゐる。」

かう、おつしやつて下さいました。

谷村さまのお話を聽いて居りますと、わたくしは何だか氣が遠くなるやうでございました。あまりに感動したからでございませう。わたくしは、永い永い眠から眼が醒めたやうでもあり、また、うつらうつら夢を見てゐるやうでもありました。

わたくしは、京都を異郷と思つてゐたことの申譯なさを心から、自分で詫びました。内地人たちを自分とは縁の薄い存在と僻んでゐたことをも悔いました。は、自分の祖先の郷里の、自分の血縁のところに遊び[に]來てゐるやうな心安さを感じました。妙子さんや、淺茅さんや、克麿さんも、俄かに親しみを増したやうに感じられました。

わたくしは、あまりの嬉しさに上氣して家に歸りました。父や母や兄のゐるところで、谷村さんから聞いたことを、詳しく申しました。わたくしは、お父さんたちも、この昔の光榮を聞されたら、わたくし同様に、深く感動すること[ゝ]思ひましたが、わたくしの期待はすつかり外れました。父は、吐き出すやうに、

「そんなこと聞かされて何になるか。朝鮮人は金がなくては駄目だ。金以外に、われわれ朝鮮人の頼るところも、希望もないんだ」

かういつて、不機嫌な顔で、ぷいと出かけてしまひましたし、兄は、兄で、

「お前は、そんなに暇があるのか。女らしく家に引込んでゐて針仕事でもせい」

と、これまた怒つた顔をするのでした。

わたくしは、泣きたくなり、親たちに、激しい反感の起きるのを、どうすることも出來ませぬでした。どうして、親たちは喜ぶべきを喜びもせず、感謝すべきを感謝もせず、たゞ金々と、金ばかりを尊ぶやうになつたのでせう。

無一文で内地へ渡つた父はずゐぶん苦勞をしましたことでございませう。卑しい商賈をやつて、内地の方たちに、蔑まれて來たし暖かい人情に接する機會が少かつたからでございませうか。それとも、このわたくしが、まだ世間知らずの女の子で、世の中を自分に都合のよりやうにばかり眺めてゐるのでございませうか。

わたくしは父の同郷の人たちの血液の中には、惠慈や、曇徴や、李退溪先生の血管を流れてゐた血液に宿つてゐた精神が、殘つてゐるものと信じたうございます。そして、この尊い、大きい精神が、今一度眼醒めて、昔にも増した、大きな力と光を發することが出來るものと信じたうございます。

わたくしが、先生の作品を讀みたがるのもこのためでございます。もしや先生の作品の中に、わたくしに電撃的な衝動を與へるやうな大きなものがありはしないかと、思ふからでございます。先生の血液の中には、すでに光榮ありし祖たちの精神が眼醒めて、力と光を發してゐるのではなからうかと、それを知りたいからでございます。だから、どうぞ、一日も早く、先生の「○○」を讀ませていたゞく道をお教下さいませ。

先生。これで、筆を擱くつもりでございましたけれども、お序でに、もつと、わたくしの身の上や、氣持をお聞き願ひたいと存じます。どうぞ、わたくしを、無躾な、輕率な女の子とお叱りにならないで、あはれな娘の訴へごと[と]思召して、お許し下さいませ。

わたくしは、いつの間にか、谷村さまの末の御令息の克麿さまを、お慕ひ申上げるやうになりました。克麿さまも、最初はわたくしを一朝鮮娘として、同情していらつしやつたことでございませうが、たうたうわたくしに愛の御約束を下さいました。克麿さまはより二つ上の二十一で、今大學の文科の二年の方でございますが、今年が徴兵適齢でございますから、十二月には入營なさることゝ存じます。家柄から申しましても、學歴から申しましても、わたくしとは、もとより不釣合でございまして、わたくしはずゐぶん躊躇致しました。克麿さまとわたくしとの關係の進みやうは、詳しいことを申上げれば、いろいろな曲折もございましたが、長くなりますから申上げませぬ。しかし、たゞ一つ、わたくしたちの關係を固めさせた一つの挿話だけを申上げさせていたゞきます。

昨年の秋でございました。川村家の御先祖さまの法要があるといふので、妙子さまに誘はれて、わたくしも法隆寺へお詣を致しました。その時、川村家の親戚の方が十數名參列なさいましたが、その中には谷村家からも、谷村翁や、淺茅さまや克麿さまも見えていらつしやいました。恰も明治節と日曜と休日が二日つゞいたゝめでもございませうが、法要が終ると、一部の方は奈良に一泊することゝなりました。

わたくしは、谷村さまから大和の史蹟や、奈良朝時代の諸々のことを語り聞かされました。聖武天皇と光明皇后さまのお話はことにわたくしたちを千何百年の昔に呼び戾すやうでございました。しかもそれが正倉院拜殿の後でありましたので、一入[[4]](#footnote-4)感動深く、ありし日の奈良の都が、眼のあたり浮び出して來るやうでございました。谷村さまは、何を語るにも、新羅や百濟や高勾麗との關係を云ひ抜かすことはございませぬでした。

翌日、は妙子さんと克麿さんと淺茅さんと三笠山に上つたり、唐招提寺や法華寺を見たりしましたが、すべてが、わたくしには夢のやうで、それこそ青春と回顧の樂に浸つてゐたのでした。克麿さんは、そのお父さま同様、歴史に詳しく、特にわたくしのために、いろいろと朝鮮の文化の美しさを説明して下さいました。まるで、わたくしが正賓になつたやうな、それはそれは大した優遇振りでございました。

わたくしたちが唐招提寺についたのは、夕暮でしたが、克麿さまは、聖觀音像の前で、「おれは、この聖觀音さまが一番好きだ。どうだ。實にやさしい、しかも生々したお顔だらう。これも百濟の作品だがね、法隆寺の百濟觀音とは、氣持も手法も違ふよ。聖觀音さまには無限の若さがある。それが好きだよ」と大變熱心に讚めていらつしやいました[[5]](#footnote-5)。

聖観音さまは、薄明に黑光を發していらつしやいました。わたくしは克麿さまの御氣持を理解しようと思つて、一生懸命に、聖觀音像を見凝つめてゐました。わたくしが、夢現に見惚れて居りますと、いきなり克麿さんが、

「新井さん。此方[に]顔を向けてごらん。」

と、どなりましたので、わたくしは、何氣なく、克麿さまの方へ顔を振り向けました。さうすると、克麿さまは、じろじろわたくしを見凝めてゐるかと思ふと、

「おい淺茅。新井さんの顔が、聖觀音さま、そつくりだらう。その圓みを帶びたところや、引締つたところやね。さうでせう、妙子さん。」

かうおつしやいました。

「あら、まあ」

と、わたくしは眞赤にして顔を背けました。

「さうだよ。やつぱりさうだよ。百濟タイプだな。聖觀音さまも信子さんも。」

克麿さまは、かう、ひとり悦に入つて居りました。

淺茅さまは、

「ほんたう」

と、お兄さまのことばに相槌をお打ちになりましたが、どうしたのか、妙子さまは暗い苦笑をなさるのでした。

その晩でした。わたくしが、克麿さまに、愛を要求されましたのは。そしてわたくしが克麿さまに愛をさゝげましたのは。

克麿といふ方は、貴公子（谷村家は華族の分家でございます）に似合わず、大層平民的な方でありましたが、やつぱり上層階級の血のせゐでございませうか、多少傍若無人なところがございました。しかし、それがきざではなく、いかにも大らかで、自然でございました。もつとも、克麿さまのことなら一も二もなく、わたくしには立派なものに映つたのでございますが。克麿さまは、學問に熱心な方ではなく、たゞ好きなものを讀む、氣の向いたことを考へるといふ風な方でございました。大變男性的で、お體格もよく、劍道も相當お強いといふことでございました。そのお父さまの谷村さまも、七十の高齢でありながら、あんな氣が若くていらつしやるのを見ると、その健康や快活な御氣性は、御血統からなのでございませう。淺茅さまだけは、お母さまに似て、如何にもなよなよした女性らしいお方でございました。

克麿さまが、わたくしを愛する、その愛の仕方は、實に暴風のごとくでございました。わたくしは、身の行末に對する不安や、いさゝか恐しくもなりましたが、それでも幸福でございました。この奈良の古都に於いて、わたしは知らずにゐた榮光に眼醒め、それと同時に、愛に燃えることが出來たのでございます。十八娘で大それたことをした奴だと、先生もお叱りでございませうが、しかし、わたくしは、あの日のことを少しも後悔は致しませぬ。いゝえ、後悔しますどころか、あの一日のことをわたくしは、いつまでもわたくしのもつとも祝福された日として、記憶致しませう。

先生。克麿さまとわたくしとの幸福は、しかし、永續きは致しませぬでした。結論から申上げますと、克麿さまは、川村妙子さまと御結婚なさいました。勿論、わたくしはその御婚禮には呼ばれも致しませぬでした。わたくしは、神さまの前で誓ひます。わたくしは、決して、前以つて、克麿さまが、妙子さまと相思の間柄とは存じませぬでした。わたくしは、妙子さまの一方ならぬ御好誼を裏切つて、克麿さまをわが夫にしようとしたのではございませぬでしたが、傍から見れば、如何にもさういふ形になつてしまひました。わたくしにそれほど好意を寄せて下さつた、妙子さまや川村家の皆さまに、「あの恩知らずの朝鮮娘奴が」と懀まれることを思ふと、かへすがへすも殘念でございます。

克麿さまは、御婚禮の前に、わたくしに會見を申込み下さいましたが、わたくしはお斷り、申上げました。

「わたくしは、あなたさまの御事情は、よく存上げて居ります。わたくしは御二人さまのお幸福をお祈申上げます。お會することは御遠慮申上げます」と返事を差上げました。

實際のところ、わたくしの氣持は、この手紙通りでございます。わたくしは、妙子さまに對しても、克麿さまに對しても、いさゝかの不滿も怨みもございませぬ。どうしてこんな氣持になれたものか、自分ながら不思議に存じて居ります。わたくしは、自分がこんな氣持に、亂されない氣持になれたことを、わが先祖たちの大らかな、樂天的な血の遺傳として、感謝致します。もしか、先生のお作品に、かういふ氣持が書かれてゐるのではなからうかと、そんな氣も致します。谷村さまが、われらの祖先が寛大で悠長であつたことを教へて下さいましたが、自分にもその精神が傳つてゐるのかと思ふとなつかしくなります。

とはいふものゝ、先生、十九の女の子としては、この打撃が、時々耐へがたい苦痛になることもございます。わたくしは、親たちから屏居命ぜられて居ります。それも、わたくしはありがたく存じて居ります。わたくしは川村、谷村兩家との關係を、深い深い師弟の縁として、いつまでもいつまでも感謝しながら、わたくしをより良き人間に仕上げることに精進したい決心でございます。しかし親の氣持は、わたくしのそれと一つではございませぬ。親たちはしつきりに、克麿さんを怨んで居りますし、川村家への感謝の情さへも打忘れたやうなことを申して居ります。親たちは、わたくしの事件をも、妙に僻んだ感情で處理してゐるやうでございます。谷村家が、わたくしたちを馬鹿にしたのだといつて憤慨して居ります。わたくしがいくら克麿さまの事情を辧解しても、それには耳も傾けやうとは致しません。

「死んでしまへッ」

父は酒気を帶びるとかういふことさへ申して居ります。馬は馬づれだ、お前にふさはしい男に嫁に行けと申して居ります。これは、親としてはもつともなことで、わたくし風情が谷村家のお嫁に入らうなんて、そもそも滅相もないことでございましたでせう。しかし私は、川村、谷村兩家のお蔭で、いろんな貴いものを學ぶことが出來ました。

先生。わたくしは、もうお嫁に行かうなど思つては居りませぬ。わたくしは何とかして、わが郷里と同胞の地位を高めることのために生涯をさゝげたいと存じます。川村、谷村兩家で學んだものを、郷里の皆さんにお傳へ致したい、そして、郷里の人たちが皆高い文化をもつた、高い知性と道徳性と審美性をもつて到るところで、親愛され、信頼されるものにしたいと念じて居ります。

先生。これは世間知らずの無知な女の愚かな空想でございませうか。或は戀に敗れた女の負惜しみでございませうか。わたくしはさうは思ひませぬ。さう思いたくはありませぬ。親たちが言張つて居りますやうに、わたくしが、わたくしにふさはしい誰かと結婚をすると致します。結婚をすれば、子供が生まれませう。子供を生む前に、まづ、子供たちが仕合はせになり、尊敬される環境を作るべきではないでせうか。子供たちが樂しむべき文化と、尊敬さるべき地位とを築き上げずに子供を生みつけることは、殘忍なことではございませぬでせうか。わたくしがしばしば親たちの無知を、腑甲斐なさを、文化[の]低さを怨むことがありますやうに、子供たちも必らずやわたくしを怨むことでございませう。わたくしは、わたくしの子供が立派に谷村家と結婚ができるやうにしてからでないと、子供を生みたくないやうな氣が致します。

先生。わたくしも今や朝鮮同胞も天皇の御民にされた事を存じて居ります。われわれの男の兄弟たちは内地の兄弟たちと同様、陸軍にも海軍にも入れて頂くやうになつたことも存じて居ります。今年の一月に入営した朝鮮人の學兵たちが、北方の軍隊にも居つて、大變讚められてゐることを聞いて居ります。これは申すまでもなく、無邊の皇恩であつて、たゞたゞ感激の他はございませぬ。しかし、わたくしが日常逢つて居ります、郷里の同胞たちのありさまでは朝鮮人が本當に到るところで尊敬されるといふことまでには、まだまだ距離がございます。父やその友人たちは、自分たちの不仕合せの責任を人に轉嫁するやうでございますが、わたくしは、さうは思ひませぬ。どこまでも、わたくし自身の責任だと存じますし、わたくしが、努力さへすれば、今一息努力さへすれば、必らず滿足に行くものと存じます。このことにつきましても、先生の御判斷を願ひたうございます。

先生。今朝もわたくしは父から酷くお叱りを受けました。

「嫁に行くのが嫌なら、尼にでもなれッ」

と申すのでございます。わたくしは、いつそのこと、尼にならうかとも考へました。しかし、わたくしは、現實のまゝの世界で強く生きて往きたい衝動を押へることが出來ませぬ。わたくしは恐らく、近々工場へ入ることゝ存じます。皆さん、戰爭のために一生懸命になつていらつしやるのに、わたくしのやうな暇なものが、家の中に引籠められて、とりとめもない空想に耽つてゐる場合ではないと存じます。それのみならず、激しい勤勞に疲れゝばつまらない惱の起る餘裕もないのではないでせうか。

親は恐らく、わたくしの工場入りにも同意しないことでせう。父は家名を汚す娘のわたくしを何とかして早くかたづけたいので一杯のやうでございます。

いづれにせよ[、] わたくしの將來は、平坦ではないことゝ存じます。家にゐては、親に叱られ、社會へ出ましても、二度と妙子さまたちと樂しんだ日は歸つて來ないことゝ存じます。わたくし、多くの苦しみを生き抜くべき運命の下に生まれて來たやうに思はれてがございませぬ。わたくしは仲々良妻賢母として、世の中を渡れさうには思はれませぬ。わたくしは、荒れ狂ふ波の上に、わたくし小舟の纜を切つて、漕ぎ出す氣で一杯でございます。わたくしは、如何なる苦しみにも、あざけりにも、逆境にも耐へ忍んでわたくしを磨き上げたいと存じます。神さまはわたくしを世に送りたまふ時に、必らずや何かの使命を與へたまうたものと信じます。わたくしをこの父の子にしたまうたのも、川村家や谷村家との縁を結ばせたまうたのも、皆、神さまの御摂理かと信ずるやうになりました。それで、わたくしは、わたくしに與へられるすべての運命を甘んじて、受けて行かうかと存じます。

わたくしは今や完全に孤独でございます。唯一の友と、唯一の夫と、そして唯一の親兄弟とを同時に失つたも同様に考へられます。心の中に惱みがあるからといつて、今更妙子さまへ訴へるわけにもまゐりませぬ。まして谷村家を訪れるわけにもまゐりませぬ。親に逆ふ子は親に見放されます。腑甲斐なき妹は、兄にもいとしがられませぬ。變らぬは母の情でありますが、母とわたくしとも別世界に住んでゐるやうなわけで、わたくしは完全に孤獨な一人の女の子でございます。先生、宗教はかうした境遇に生まれるものでございませうか。御念佛は、わたくしのやうなものが唱へるものでございますか。

先生。わたくしが、先生の御作品にかこつけて、このお手紙を書きますのも、わたくしのこの孤獨な切ない心境故かも存じませぬ。一度壇上の御姿を仰いだゞけの先生の御姿を心に描きつゝ、このお手紙を書いてゐるのには、さういふ邪念が雜つてゐないとは申されませぬ。何も、わたくしは、名士の方に御手紙を差上げて、その御筆蹟を僥倖しようとする文學少女の氣持でないことだけは斷言出來ます。しかし、この御手紙が、單に先生の彼の御作品に關するお問合せでないことだけは事實でございます。何だか、先生にお縋りしたいやうな、手を引いて導かれいやうな、さういう切ないお慕はしさが、たしかにありますことを、わたくしは正直に白狀申上げます。

先生、いよいよこれで擱筆致します。何卒いつまでも御健康にわたらせられて、朝鮮の文化をぐんぐんお高め下さるやう、はるかにお祈り申上げます。

1. 『新太陽』15-10、新太陽社、1944年10月 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「烏滸がましい」は「おこがましい」と読み、生意気、みっともないという意味。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 「伊弉諾尊」は「いざなぎのみこと」と読む。日本神話で女神「伊弉冉尊（いざなみのみこと）」とともに国と神を生んだ男神。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 「一入」は「ひとしお」と読み、「ひときわ、一段と」の意。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 聖觀音像は唐招提寺ではなく、隣の藥師寺にある。李光洙は1942年11月、第1回大東亞文学者大会で訪日したとき河上徹太郎とともに薬師寺を訪れ、帰国後『文學界』に寄稿した「三京印象記」（1943.1）に次のように書いた。「河上氏は藥師寺の聖觀音像が特に好きだといはれたが、さういはれて見れば、河上氏の相貌が、その觀音さまに似たところがある。やつぱり因縁があるのだらう。この聖觀音さまは百濟人の作だといふことだ」 [↑](#footnote-ref-5)